

葉集を読む

松岡 隆子

講堂の昼深閑と処暑の風

鈴木 富代

おそらくこの講堂は学校の講堂であろう。処暑は二十四節気の一つで8月23日頃である。となると学校はまだ夏休み中である。誰もいない真昼の講堂はひっそりと静まり返っている。辺りを吹く風がどことなく涼しい。処暑と思えばこそ感じられる涼しさである。ささやかな季節の推移に敏感であるうとする俳句の心が捉えた（処暑の風）である。

二学期を教室の窓開けて待つ

小田 幸子

長い夏期休暇が終わるといよいよ二学期。二学期は運動会や文化祭などの行事も多く、勉強にも最も身の入る学期である。始業式の朝は早めに登校し、先ず教室の窓を開ける。休暇中に溜まった空気が一掃され、新鮮な空気が入ってくる。登校してくる生徒たちの元気な顔を思い浮かべながら、机や椅子を整える。窓を開けて待つのは生徒たちであり二学期そ

のものなのである。二学期を迎える緊張感を教師の立場で詠んでいて異色である。

猫が猫呼ぶお社の木下闇

西島 美晴

猫たちの密会？ 密談？ などと想像が膨らむが、そうではあるまい。ただ涼しい木下闇を見つけた猫が仲間を呼び寄せているのだろう。木々が鬱蒼と茂った下闇は猫にとつて格好の休息の場、ましてやお社の下闇である。仲間たちと、或いは子猫たちと、ひんやりとした木下闇に寝そべて暑さを凌いでいるのだろう。などと想像してみるが、実際は猫の生態にも行動にも疎く、的外れな鑑賞になっているかもしれない。いちど愛猫家の人たちの猫談義を聞いてみたい。

炎昼のホースの水の走り出す

佐藤 陽子

炎昼に水を撒いても焼け石に水かもしれない。それでも少しは灼け切った飛石や庭石を冷ますことが出来るだろう。水道を全開にするとホースを進る水の勢いが手に伝わってくる。ホースの水は最初は湯のように熱いが、すぐに冷たくなる。炎昼の東の間の涼感が快い。（走り出す）という実感で掴んだ言葉が息衝いている。

秋の蚊の昏さまとひてあたりけり

植原 恭子

今年は何時まで猛暑が続いた所為か、秋の蚊によく刺された。庭に出ただけで纏わりついてくる蚊は、羽音もたてず

に飛んでくるので油断できない。気が付いた時にはあちこち刺されていたりする。なかなか手強い秋の蚊だが、秋も深まり気温も下がってくると活動も鈍ってきて、人を刺す力も衰え次第に弱っていく。掲句は、昏さをまとったまま絶えていく秋の蚊の哀れを詠んでいてしみじみとさせられる。

黙禱に長さとももの原爆忌

浅尾 泰昭

8月6日の広島忌には午前8時15分から、9日の長崎忌には午前11時2分から、それぞれ一分間の黙禱が捧げられる。慰霊の祈りと平和への祈りの一分間は、時計上の時間を越えた一分である。何十万人という犠牲者の御霊と、今なお被爆の傷みを抱えて生きている人たちを思う時、黙禱の一分は重い。その重さを作者は長さで表現する。

この度ノーベル平和賞が日本原水爆被害者団体協議会に贈られた。被団協の方々の歓びは計り知れない。授賞理由の中に「日本の新しい世代が被爆者の経験とメッセージを継承している」とあったことに世界中の人々の祈りを感じる。一分という黙禱の長さは永遠に続いていくだろう。

綿あめと母の手うれし浴衣の子

加々美敦子

一般的に俳句では嬉しいとか淋しいなどという感情を直接表す言葉は使わない方が良くとされるが、掲句の場合の（うれし）は必要であろう。（うれし）の一語が（綿あめ）と（母の手）と（浴衣の子）を繋いでいる。（うれし）によって浴

衣の子の嬉しさがストリートに伝わってくる。綿あめを買ってもらい母に手を引かれて歩く浴衣の子を、作者もうれしうに見ている。初めての浴衣もうれしかったに違いない。

日盛に出でて歩幅の小さくなる

田辺 文枝

連日耐え難い暑さが続く。暑い日は家に籠っているに限ると分かつていても、用があつて出かけなければならぬ時もある。日盛りの暑さは覚悟して出たものの、目のくらむような暑さに身が竦み自ずと歩幅が小さくなる。小さな歩幅で歩くことは体力の消耗を防ぐことにもなる。作者は自ら自分の身を守っているのである。事実を述べただけの句であるが、日盛の歩幅には考えさせられるものがあつた。

その他の印象句

亡夫送る燭早々に野分前	矢作 裕子
かたはらに母のぬさうな盆用意	朱 桂子
女学校跡地白花さるすべり	加藤 和美
コンサート余韻の未だ月今宵	野尻 敏子
油照り子の逃げ込める秘密基地	森田 道子
マーケティンク議論の後のかき氷	伊藤 生子
虹の橋仰ぎて共に米寿なる	菅 雅子
湯の里の夜は早稲の香に包まるる	山崎 和音